





図-2. 対象物の着目頻度 (%) n=527

表-1. 目的変数と説明変数

目的変数	行動		
カテゴリー	直進	沿道側回避	車道側回避
	停止	錯綜	追従

説明変数	対面歩行者	沿道側歩行者	車道側歩行者
	街灯	沿道側植栽	車道側植栽
広告・看板	沿道側施設	など	
カテゴリー	I 危険, II やや危険, III どちらとも言えない,		
	IV あまり危険とは感じない, V 全く危険でない		

表-2. 直進移動を継続するか変更するか分析結果 n=527

	レンジ	偏相関係数
対面歩行者	2.3926	0.5417

相関比 : 0.2935 , 判別の中率 : 81.21%

表-3. 直進と停止を除いた行動の分析結果 n=381

	レンジ	単相関係数	偏相関係数
対面歩行者	0.2890	0.0534	0.0859
街灯	0.4825	0.1761	0.1094
車道側植栽	2.5122	0.0687	0.1432
沿道側歩行者	0.8826	0.2836	0.2211
手前の歩行者	2.8717	0.5545	0.5330
沿道側植栽	0.9313	0.0452	0.0818
看板・広告	0.4217	0.0809	0.0754
バス停	1.0583	0.0417	0.0926
ベンチ	0.9419	0.0178	0.1073
自転車・バイク	0.9463	0.1891	0.1499

相関比 : 0.3975 , 判別の中率 : 61.15%

表-4. 沿道側回避か車道側回避かの分析結果 n=288

	レンジ	単相関係数	偏相関係数
街灯	1.4077	0.1522	0.1459
沿道側歩行者	3.0650	0.4453	0.4705
車道側歩行者	1.5406	0.0984	0.1851
手前の歩行者	3.5869	0.2236	0.2394
沿道側植栽	1.7456	0.1590	0.2498
バス停	1.7711	0.2176	0.2143

相関比 : 0.3475 , 判別の中率 : 82.64%

高いほうから3つを図-2に示す。歩行行動において、着目しているものは限定されており、多くは対面歩行者に着目していることがわかる。

#### 4. 移動空間評価が歩行者行動の

##### 意思決定に与える影響

##### (1) 意思決定のモデル構造

本研究での意思決定過程の枠組みは、①歩行者は視覚の中の歩行者及び地物に着目する、②それら対象物の安全性について評価を行う、③評価に基づいて直進、対面歩行者等回避、停止、追従、錯綜などの行動を決める、と仮定する。表-1に示すとおり、本調査では、歩行者の行動を目的変数、被験者が着目し評価した歩行者や地物を説明変数とした。

##### (2) パラメータ推計結果

目的変数、説明変数ともに定性的なデータなので、分析には数量化2類を適用する。試行錯誤の結果、1.直進移動を継続するか変更するか、2.直進と停止を除いた行動、3.沿道側回避か車道側回避か、で分析を行った。分析結果は表-2~4に示す。

#### 5. まとめ

1.表-2より、直進するのか、直進以外の行動をとるのかは、対面歩行者の有無、対面歩行者に着目しど

のように評価するかが大きく影響している。対面歩行者を危険、やや危険、どちらとも言えないと回答した場合はほとんどが直進し、あまり危険とは感じない、全く危険ではないと回答した場合は直進を選ぶ可能性がややある。

2.表-3より、直進停止以外で分析すると、あまり良いの中率は得られなかった。手前の歩行者のレンジ、相関係数が高いため、自分の前を歩いている歩行者のことを注視していることが伺える。

3.表-4より、沿道側に回避するか、車道側に回避するかを選択するとき、対面歩行者はほとんど影響していない。対面歩行者は直進をするかしないかの大きな選択要因であることがわかる。また、相関係数から、沿道側回避と車道側回避のどちらを選択するかの大きな要因の一つは、沿道側歩行者である。

今後サンプルを増やして、より一般的な意思決定要因を明らかにする。

#### <参考文献>

1)中澤,柳沢,轟他:歩行空間形状と交通流動状態を考慮した歩行者行動のモデル分析.第56回土木計画学研究発表会.(2017.11.4)